

思い出いろいろ

第10期 樋口 祐一（1962年卒業）

私はアメリカ科10期卒業で、現在カリフォルニア州オレンジカウンティに在住している。同級生のなかで唯一人の長期在米生活者で通算約33年。気候も良いカリフォルニアで引退生活を過ごせること、二人の娘もこちらの生活に順応していること、で永住を決心した。

引退生活を送っているが、現在南加東大会（南カリフォルニア東大会）の会長を勤めている。活動の一環として、毎年夏に海外体験活動で訪れる現役東大生6名を受け入れてお手伝いをしている。今年で4年目となる。先輩を訪れてゴルフをやったり、酒を飲んだりということではなく、ハリウッドを持つ当地の特色を活かして、チームに分けて15分ほどの短編記録映画を創ることをやってもらっている。自分たちで主題を決め、インタビューする人を選別してそれなりに纏めている。東大卒業後USC大学院で映画関係の博士課程で勉強しているWさん、東大PEAK（教養学部英語コース）のI准教授の指導の下、質の良いものに仕上がって来ている。毎年PEAKの学生2名が参加しているが、良く出来る学生達だ。これまでの主題は、日系人の日本語教育、写真花嫁の実態、和菓子の歴史、エンターテインメント産業の実情、などなどである。

翻って、私たちの主任教授であり、「生徒雑巾説」（絞れば絞るほど良い）でも有名な中屋健一先生の思い出について触れたい。

- 1 卒業後も教え子のことを気にかけて、入社3年で赴任したN.Yに訪ねて来られた。未だN.Yの事情も分からない私に代わって、飲茶をご馳走してくれたり、夜のバーにも連れて行ってくれた。「頑張れよ！」と背中をおして頂いたことを良く覚えている。夜の部には当時国連に勤務されていた明石康、東銀の鈴木正美両先輩の同席を賜り、愉快地過ごすことが出来た。
- 2 二度目の海外勤務地シドニーにも先生は訪ねて来られた。東大を退官され、当時は成蹊高校の校長をされていた。私の社宅にお泊り頂いた。3泊のご予定だったので、シドニー及び郊外の観光やお食事にお誘いし、充実した時間を過ごして頂いた。こうしている内に、労働者の主張が強いお国柄のオーストラリアのこと、空港管制官のストが勃発、一切の飛行機が発着出来なくなった。先生の関係先には直ちに電話で事情を

連絡したが、ストが何時解決するのか皆目見当がつかない。ということで結局先生は我が家に10日間滞在された。この間どうして過ごして頂くか、苦心した。駐在員夫人を集めて、子女進学講習会及び個別相談も行った。歯に衣を着せない辛口講習でハラハラしたが、結構好評だった。

家のなかでは、台所その他自由に使って頂いた。早起きの先生が毎朝朝食を準備してくれた。近くのスーパーで食材を整え、先生お得意のトムポーロの料理も調理してくれた。非常に美味しく家内は料理方法の伝授を受けていた。

先生とこんなに長い間ご一緒するのは初めてで、その人となりがよく分かった。授業では厳しく、一見豪放磊落に見えるが、神経細やかで、寂しがり屋、実に良く気がつく人である。豪放と言えば先生のイビキは聞きしに勝る豪快さ。家中に響き渡るので、当初娘二人は怖がって夜なかなか眠れなかったようだ。漸くストが終了、先生は無事に日本へ向け出発された。私には疲れが残ったが充実した体験となった。

学生時代の苦い思い出が一つある。

中屋先生の授業の一つで、与えられた本の概要を発表し、討論を行うというものがあった。2週間前に400頁程の英文原書を渡されて、私の発表担当がやってきた。当時私は、教養学部時代の仲間5人と塾の経営、教師をやっており結構忙しかった。加えて性分で直前まで準備をせず、2、3日徹夜で備える予定だった。こんな時に塾の連中から忘年会をやろうとの声がかかった。5人で手伝えば残りの200頁くらい簡単に読める。忘年会の後、徹夜しようと言ってくれた。

宴会のあと約束通り、本郷のT君、O君の下宿に到着したが、私を除いて白河夜船。3年もの付き合いで、彼らが私のために英文を読んで助けてくれる筈はない。分かっているのに信じた自分が情けない。一人起きて、最後の手段、序文とあとがきを何度も読んで作者の意図をつかみ発表内容を作り上げた。

翌日意識もうろう状態で、しどろもどろの発表を行った。真っ赤な目、少しはアルコールの匂いの残る私をみて、中屋先生、樋口は昨日何かあったなと感じた様子。級友も意地悪な質問をせず、何とか乗り切れた。

さて、現在のアメリカは、昔の強き、良き国から変わって来ているように思う。それでもここに骨を埋める覚悟だ。